

## 7カ月で太陽見たのは15分 めれぎぬのスパイ容疑 中国で懲役6年

毎日新聞 2022/10/26



中国語で書かれた起訴状を手にする鈴木英司氏 = 東京都千代田区で 2022年10月20日（画像の一部を加工しています）

連載「邦人収監」は全3回です。

このほかのラインアップは次の通りです。

【独自】 [北京空港で目隠し、突然の拘束](#)

第1回 [新華社が報じていない話題は違法](#)

第3回 [中国のスパイが明かした活動の実態](#)

「スパイ行為をした」として中国当局に約6年間拘束され、今月帰国した日中青年交流協会理事長、鈴木英司（ひでじ）氏（65）が毎日新聞のインタビューに応じた。中国当局は、正式な逮捕手続きを取らずに鈴木氏を約7カ月にわたりカーテンを閉め切った部屋で監禁した。鈴木氏は「（約7カ月で）太陽を見られたのは15分だけ。本当につらかった」と語った。

中国の習近平政権は2014年以降、「反スパイ法」や「国家安全法」の制定を通じて社会の統制を強め、外国人を厳しく監視。15年からスパイ行為に関わったなどとして中国で日本人を拘束し始めた。習政権下で拘束された日本人の実情が詳細に明らかになるのは極めて異例。

鈴木氏は16年7月、シンポジウム出席のために北京を訪問した際、スパイなどの捜査に当たる国家安全部の当局者に拘束された。「居住監視」という名目だが、24時間態勢で室内に監視員2人がおり、実態は監禁。弁護人を依頼することも許されなかった。



2015年12月の鈴木英司氏。当時は体重が96キロあった = 本人提供  
取り調べを経て17年2月にようやく逮捕の手続きが取られ、拘置所に身柄を移された。同年5月に起訴。20年11月にスパイ罪で懲役6年の実刑判決が確定し、刑務所に収監された。6年以上にわたった監禁生活で、体重は96キロから

68キロに激減した。鈴木氏によると、公選弁護人はまともな弁護をしなかったという。鈴木氏は「不当な身柄拘束であり、冤罪（えんざい）だと強く訴えたい」と怒りをあらわにした。

国家安全部に関連する業務や裁判記録は通常、公表されない。鈴木氏が毎日新聞に提供した判決文から、初めてこの事案の詳細が判明した。

判決は、鈴木氏が13年12月4日、北京で中国政府高官と会食した際、中国と北朝鮮に関する違法な「情報」をやり取りしたとし、これがスパイ行為に当たると指摘。中国政府が「スパイ組織」と認定する日本の政府機関から鈴木氏が「任務」を帯びていたとして「有罪」の判決を言い渡した。

判決や起訴状はこの「情報」について具体的な内容を記していない。ただ、北京市国家安全局の職員は鈴木氏への取り調べの中で、北朝鮮の故金日成（キムイルソン）主席の娘婿、張成沢（チャンソンテク）氏が処刑されたとのニュースが違法な「情報」に当たると明らかにしたという。当時、韓国政府の発表を通じて、張氏が処刑された可能性があることは日本を含む世界各地で報じられていた。

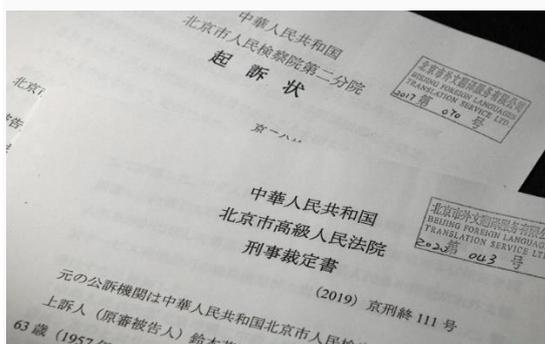
鈴木氏は「私が処刑について『どうなんですか』と聞き、中国政府高官は『分かりません』と応じただけ。公開情報に関する会話がなぜスパイ罪に当たるのか。ばかっている」と憤った。また鈴木氏は、日本政府の関係者とこの件でやり取りはしていないと強調。「私は何も悪いことはしていない」と訴えた。

鈴木氏は1980年代から日中友好活動に携わり、訪中歴は200回以上。日中友好7団体の一つである日中協会の理事などを歴任した。中国では北京外語大などで教壇に立ち、中国外交部（外務省）にも多くの教え子がいる。だが今後、中国側の友人と会えば相手が捜査対象となる恐れがあり、連絡を取ることもできない。鈴木氏は「中国の友達とは二度と会うことができない」と涙ながらに語った。そのうえで現在の中国について「『中国なりの人権がある』と中国政府は言うが、人権は万国共通だ。人権問題に関する批判に真摯（しんし）に耳を傾けるべきだ」と強調した。

日本の外務省によると、15年5月以降、日本人16人が中国当局に拘束され、うち5人は起訴に至らずに帰国。1人は逮捕、勾留されている。残り10人は起訴され、うち9人について懲役3～15年の実刑判決が確定した。4人は服役中で、1人は服役中に死亡。鈴木氏を含む4人は刑期を終えて帰国した。19年9月には北海道大教授が当局に約2カ月間拘束された後、釈放された。外務省領事局海外邦人安全課は「早期の帰国を実現するため（中国側に）働きかけている」としている。【「邦人収監」取材班】

## 中国高官との雑談が「スパイ行為」 暗い密室に 監禁生活の実態は

毎日新聞 2022/10/26



鈴木英司氏の起訴状と刑事裁定書（判決文）のコピー。中国語の書面に加え、日本語に翻訳したのもも交付された = 東京都千代田区で 2022 年 10 月 24 日

日中青年交流協会理事長、鈴木英司氏（65）は 2016 年 7 月、中国のスパイ取り締まり機関・国家安全部に拘束された。22 年 10 月 11 日に解放されるまで、中国の拘置所や刑務所などで鈴木氏はどのような目に遭っていたのか。証言に基づき、再現する。

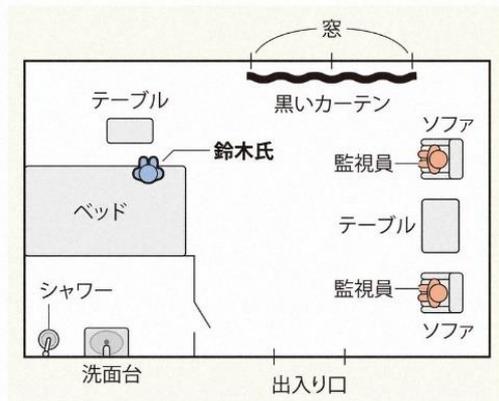
16 年 7 月 15 日、北京。太陽が嫌というほど照りつけ、首もとに汗がじっとりとにじんだ。鈴木氏は日本大使館の近くにあるホテル内の飲食店で知人と昼食をとった後、帰国の途につくためタクシーに乗った。午後 3 時ごろ、北京空港のタクシー降り場に着いた。そばに大きな白いバンが停車しているのが目に入り、バンの周囲に体格のいい男が 6 人ほどいた。タクシーを降り、荷物をトランクから出して歩き始めたその時。

「你是鈴木吗（ニーシーリンムーマ）？」（お前は鈴木か）。男の一人が問いかけてきた。「そうだ」と答えるや否や、男たちが飛びかかってきた。体重 96 キロの鈴木氏もかなわない。バンの 3 列シートの中央から最後列へ、さらにその一番奥の座席まで押し込まれた。最も逃げづらい場所だ。

「おまえたちは誰だ！」。そう問うと男の一人が「北京市国家安全局だ」と応じた。身分証を出すよう要求したが、「その必要はない」の一点張り。「なぜ私を拘束するのか」。すると、やせてめがねをかけた男が、北京市国家安全局長の名を記した紙を鈴木氏の目の前に広げた。そこには、鈴木氏をスパイ容疑で拘束することを許可する旨が記されていた。車内で無理やり、黒いアイマスクを着けられた。「抵抗しても無駄だ」と悟った。携帯電話、腕時計と、自殺防止のためか、ズボンのベルトを奪われた。どこに向かっているのかさえ分からない。1 時間ほど走っただろうか。両脇をつかまれ、アイマスクを着けたまま車から降ろされた。エレベーターに乗り、上階で降りると、体をグルグルと回転させられた。方角が分からないようにするための。廊下を歩き、室内に入れられた。

### 鈴木英司氏が約7か月にわたり監禁された 502号室の見取り図

※鈴木氏の証言により作成



502 号室の見取り図

「座れ」。手探りをすると、ベッドのような感触があった。腰を下ろすと、ようやくアイマスクを外された。内装は古びたビジネスホテルのよう。洗面所、トイレ、シャワーがある。天井を見上げると、部屋の四方で監視カメラがレンズを光らせている。しばらくして「出る」と指示された。両脇を抱えられながら廊下に

出て、斜め向かいの 504 号室に入れられた。鈴木氏がいたのは 502 号室だ。そこは映画で見る取調室のような部屋だった。奥にテーブルがあり、男 3 人が椅子に腰掛けている。鈴木氏は手前の椅子に座るよう促された。3 人とも、ポロシャツやジーンズ、運動靴といったラフな格好だ。中央にいる 40 歳前後の小太りの男がこう言い放った。「お前はスパイだ」。そして、こう要求した。「私のことは『老師（ラオシー）』（先生）と呼べ」

初日は持ち物検査などで終わり、502 号室に帰された。ベッドの向かい側にあるソファに、Tシャツを着てジャージーをはいた男が 2 人、黙って腰掛けていた。監視役だ。「午後 10 時半だ。就寝していい」と指示された。電灯を消そうとすると、「消してはいけない」。眠れないでいると、しばらくして監視役が別の男 2 人と交代した。4 交代制だと分かったのは 1 日たってからだ。

「起きろ」。監視の男の声で浅い眠りから覚めた。室内に時計がないので分からないが、早朝だろうか。朝食は中国式の蒸しパン「マントウ」。自分の椅子はなく、ベッドに座りテーブルに置かれた食事を黙々と食べる。視線の先には相変わらず寡黙な男 2 人がこちらを見ていて、落ち着かないことこの上ない。



拘束された当時の状況について語る鈴木英司氏 = 東京都千代田区で 2022 年 10 月 20 日

室内に一つだけある窓にかかった黒く厚いカーテンは閉じたままだった。「開けていいか」と問うと「開けてはいけない」。朝なのにまるで夜のよう暗い。弁護人を依頼することは禁じられた。日本大使館に連絡を取るよう再三にわたり要請し、鈴木氏の記憶では 7 月 27 日になってようやく大使館員が訪ねてきた。だが、用意された面会室に向かうと、例の取調室の 3 人組がいるのではないかと。映像を撮影され、鈴木氏が拘束された容疑について少しでも触れると注意された。大使館員の話では、現在の身柄拘束は「居住監視」と呼ばれる中国の法に基づいた手続きだという。実態は監禁だ。大使館員はこう告げた。「長期戦になります」

監視役の男たちはおおむね会話にも応じなかった。ただ、鈴木氏と同年代の男だけは違った。四角い顔に角刈りで、身長は 180 センチ超。見た目は恐ろしいが、優しくかった。室内では茶を飲むことも禁止されたが、お湯は許されており、角刈り男は頻繁にお湯を出してくれた。「何が好きか」。そう問われて鈴木氏が中国の酸っぱく辛いスープ「酸辣湯（サンラータン）」が好きだと言うと、食事の際にこっそり持ってきてくれたこともあった。いつしか角刈り男と会うのが楽しみになっていた。

取り調べが進むにつれ、鈴木氏の「容疑」がだんだんと分かってきた。13 年 12 月 4 日、鈴木氏が日本で付き合いのあった中国政府の高官 A と北京で会食をした際の会話が問題視されているようだった。「老師」は A との会話を把握してい

た。すでに A も取り調べていたのだろう。老師はある日、鈴木氏にこう迫った。「北朝鮮に関する話をしただろう。敏感な話題であり違法だ」

当時の会話を思い出した。というのも、ちょうど A と会食をする直前、北朝鮮の故金日成（キムイルソン）主席の娘婿、張成沢（チャンソンテク）氏が処刑された疑いがあると韓国政府が発表していたからだ。鈴木氏は A に処刑について「どうなんですか」と聞き、A は「知りません」とだけ答えた。「処刑のニュースは公開情報だった。おまけに（A は）『知りません』しか言っていない。なぜ違法なのか」。老師はこう言った。「中国国営新華社通信が報じていなければ違法だ」取り調べはその後も続いた。調べが終わっても、本は読めず、テレビもない。紙やペンの使用も禁止。話し相手はおらず、食事とシャワーの時間以外は暗闇でただ、じっと座っているだけ。頭がおかしくなりそうだった。拘束された日にうっとうしいくらいだった太陽が、ひたすら恋しい。一度でいいから見たい。拘束から約 1 カ月たったある日、その思いを老師に伝えると、「協議するから待て」と言われた。

翌朝、504 号室に行くと、老師が「15 分だけならいい」と許可した。ホテルの廊下に出されると、窓から約 1 メートル離れた場所に、椅子がぼつんと置かれていた。座ると太陽が視界に入った。「これが太陽かあ」。涙が出てきた。もっと近くで見たい。窓際に近寄ろうとすると、「ダメだ」と叱られた。窓の近くからは建物の周囲が見えるからだろう。すべてが秘密に包まれた場所だった。「終わり」。15 分後、男の無情な声が廊下に響いた。

#### 鈴木英司氏の収監の経緯

2013 年 12 月 鈴木氏が中国政府高官と北京で会食

16 年 7 月 北京市国家安全局に拘束される

17 年 2 月 スパイ容疑で逮捕手続き。拘置所に身柄を移される  
5 月 起訴

19 年 5 月 1 審で有罪

20 年 11 月 2 審で懲役 6 年の実刑が確定。刑務所に収監

22 年 10 月 11 日 刑期を終えて出所、帰国

#### 心で歌う「石川さゆり」 続く取り調べ、当局は日本の研究者に関心

毎日新聞 2022/10/27

2016 年 7 月、中国のスパイ取り締まり機関・国家安全部に拘束された日中青年交流協会理事長、鈴木英司氏（65）。監禁は長期にわたり続いた。室内にカレンダーや時計はなく、ペンや紙も許可されなかったため日記をつけることもできない。だんだんと今日の日付さえ分からなくなってきた。室内は冷暖房がきいているため、季節を感じる機会もない。

3 人組の取り調べは続いた。中央に陣取るのは、自身を「老師（先生）」と呼べと命じた取調官。ある日、その右隣に座っていた男が珍しく口をきいた。「おまえとは一度、会ったことがある。覚えていないか」

30 歳前後で浅黒い肌にオールバックの髪形。ギョロリとした目が印象的だ。どこか見覚えがある。思わず「あ！」と声をあげてしまった。以前、植林活動のために遼寧（りょうねい）省錦州（きんしゅう）市を訪ねた時のこと。訪問団長の鈴木氏のかばん持ちを買って出たのがこの男だった。植林は、1999 年に北京で開催された日中首脳会談の合意に基づき始動した緑化交流の一環。鈴木氏が理事長を務める日中青年交流協会が日本政府から助成を受けていた。

さか日中首脳の肝いりで始まった友好活動の現場にまで、国家安全部の監視の目があったとは。驚きのあまり、しばらく言葉が出なかった。その後も、取り調べをする 504 号室と、寝泊まりする 502 号室の間を行き来する暗闇の生活が続い

た。つらい時、大好きな歌手、石川さゆりさんのヒット曲「津軽海峡・冬景色」や「天城越え」を歌いたくなった。だが歌うことも禁じられた。仕方なく、心の中で歌い、自らを鼓舞した。

「老師」は、鈴木氏と付き合いのあった中国政府の高官や日本人のことも、しきりに聞いてきた。情報収集だろう。あまり話すと知人らに迷惑がかかる。詳しく話をしないように努めた。特に印象に残ったのは、日本での中国研究に関する質問だ。老師は、日本の高名な教授たちが数年前に取り組んだ研究プロジェクトを挙げ「どんな研究をしているのか」と問うた。

#### 「中国研究などしなくていい」

この研究は文部科学省の助成を受け、中国政府の政策決定過程などを調べるものだった。鈴木氏は「研究について聞いたことはあるが詳しいことは分からない」と答えた。すると、老師が恐ろしい言葉を吐いた。「中国研究など、しなくていい。我々は皆、そういう見方をしている。学者なども、本当はよくない」

これでは学者は怖くて中国に行けない。後の話になるが、19年には北海道大教授が北京で約2カ月にわたり拘束され、日本の中国研究者の間に衝撃が走った。日本在住の中国人学者が帰国中、当局に拘束される事例も少なくない。



監禁された502号室の見取り図を描き、手にとって当時の状況を説明する鈴木英司氏 = 東京都千代田区で2022年10月20日

ある日、いつものように504号室に連れて行かれると、会ったことのない男が老師の椅子に座っていた。きちんと制服を着ている。隣にはびっくりするほど目鼻立ちの整った若い女が座っていた。女はたばこに火をつけ、うまそうに吸った。制服の男がこう告げた。「明日から私たちが取り調べをすることになる」。その日の取り調べは短時間で終わった。

翌朝。「移動だ」と告げられ、再びアイマスクをつけられた。車椅子に固定された状態でエレベーターへ。移動に車両は使っておらず、どうやら同じ敷地内の別の建物に移ったようだ。

#### スパイ容疑者専用の拘置所へ

新たな建物の地下にある取調室に入れられると、前日に取り調べをした制服の男とたばこの女がいた。スパイ容疑で正式に逮捕され、この日が17年2月16日だと知らされた。還暦の誕生日は既に数日前に過ぎていた。新たな建物は、スパイやテロなどの容疑者専用の拘置所だった。部屋や同室者の組み合わせは定期的に入れ替えられた。親しくなるのを防ぐためだろう。同室者はおおむね2、3人いた。久々の話し相手に心がおどった。ありがたいことに、窓にカーテンはかかっていない。空には冬の太陽が雲の隙間（すきま）から遠慮がちに顔をのぞかせていた。半年前に15分だけ太陽を見せてもらって以来の「再会」だ。中国当局に拘束される前の鈴木英司氏 = 2015年12月撮影（本人提供）

人間の心理とは不思議なものだ。監禁に変わりはないが、ずいぶんいい場所にきたように感じる。室内に監視カメラはあるが、監視員はたまにしか来ない。石川さゆりさんの歌も存分に歌え、ロシアで捕まった華僑に教えてやった。逮捕後、取り調べの回数は減った。スパイ容疑を認める内容の供述調書を見せられ、制服の男にこう要求された。「署名しなさい。拒否してはならない」。「基本的な人権もないのか」と抵抗したが無駄だった。しぶしぶ署名した。鈴木氏は17年5月、起訴された。

「テロリスト」だとして連れてこられた**新疆ウイグル自治区出身の若い大学生**は、2晩泊まっただけで突然姿を消した。この大学生がいる間、鈴木氏ら同室者の手荷物検査は異様に厳しくなった。もう一人、若い新疆出身者が同室になったことがあるが、この若者も1晩でどこかへ連れて行かれた。ころころ変わる**同室者たち**は、多士済々だった。**北京市政府の元副局長**からは、中国の行政の仕組みについて詳しく教わった。

**最高裁判所の元判事**は中国法について教えてくれた。中でも興味深かったのは、国家機密に関する説明だ。「中国国家保密局が『情報』『秘密』『機密』『極秘』の4種類のうち、どのレベルかを判断する。情報が四つ集まれば秘密、秘密が四つで機密、機密が四つで極秘になる。もちろん、一つの事案だけで極秘となることもある」鈴木氏の逮捕容疑は一番軽い「情報」に認定される事案だった。これが機密や極秘となると無期懲役や死刑は免れない。同室者の大半は、鈴木氏よりはるかに重い「罪」を背負っている。みな死刑や無期懲役と覚悟しているためか、まるで吹っ切れたかのように口が軽くなっていた。

「この拘置所には『貴賓室』と呼ばれる特別な部屋がある」。同室者からそんな話を耳にしたのは、拘置所に収監されてからしばらくたった時のことだった。

【「邦人収監」取材班】

## 日本でのスパイ活動は？ 拘置所で国家安全部元職員が明かした実態

毎日新聞 2022/10/28



北京市監獄 = 北京で1999年4月21日、ロイター

2016年7月、中国のスパイ取り締まり機関・国家安全部に拘束された日中青年交流協会理事長、鈴木英司氏（65）。拘置所にある「貴賓室」と呼ばれる部屋に入る機会が与えられたのは、17年夏のことだった。

この日、再び寝起きする部屋が変わると看守から指示があった。同室者も変わることになる。「11号室に行く」。看守の言葉に耳を疑った。11号室は貴賓室だ。ここは、逮捕前に地位が高かった人物が使う部屋だと聞いてい。たまたま他の部屋に空きがなかったため、鈴木氏にあてがわれたようだった。

貴賓室に入った。他の部屋では板張りの床に直接布団を敷いて寝る。だがここでは革張りのベッドが三つ並んでいた。壁紙も革張り風だ。寝具にも高級感がある。久しぶりに熟睡できた。同室になった**北京の元郵便局長**はこんなことを教え

てくれた。「国際郵便物は一つ残らず開けて調べられている。特殊なのりのはがし方があって、開けたとは分からないんだ」

塀の外の世界にいても分からないことを、ここでは多く知った。誰よりも興味深い話を聞かせてくれたのは、**国家安全部に勤めていて逮捕された30歳**くらいの男だった。同室になったのは貴賓室ではなく、板張りに布団の部屋にいたころだった。詳しい容疑について話さなかったが、自身の行く末を「死刑だろう」と悲観していた。

**中国の習近平政権は14年に反スパイ法、15年には国家安全法を施行し、外国人らへの監視を強化。15年から中国にいる日本人がスパイなどの容疑で拘束され始めた。**国家安全部の元職員は鈴木氏に、こう明かした。「15年と16年は国家安全部内で『国家安全年』と定められ、取り締まりを強化した。あなたが捕まったのもそのためだろう」

**日本に国家安全部の職員はたくさんいるのか。そう問うと元職員はこう答えた。「そんなにはいない。ただ、(日本の)企業や大学には国家安全部が毎月、金を振り込んでいる人がいる。報告内容に応じて上積みされる」**日本に住む多くの中国人はまじめに生活している人だろう。だが、中国人によるスパイ事件が日本で摘発されているのも事実だ。

1審の公判は17年8月に始まった。鈴木氏は無罪を主張したが、公選弁護人は「初犯で重い事件ではないので軽い刑にしてほしい」と述べた以外、ほとんど何もしてくれない。**同室だった最高裁の元判事はこう言った。「中国の弁護士なんて皆、そんなもんだ」**

私選の弁護人を雇うことも考えたが、40万元(約820万円)を支払っても意味が無かった人がいるとの話を聞き、あきらめた。証人申請はすべて却下され、裁判はすべて非公開。19年5月に1審で懲役6年の実刑判決を言い渡された。公判が始まり、新たな発見もあった。法廷に移動する際、護送車で監視を担当する裁判所の職員は厳しくなかった。アイマスクを外しても注意されない。

建物の敷地の出入り口にある門柱には北京市豊台区の番地名が記されていた。拘束から1年あまり。ようやく自分がどこにいるかが分かった。敷地全体が北京市国家安全局の施設で、最初に「居住監視」されたホテルや今いる拘置所は同じ敷地内にあった。

中国は2審制だ。鈴木氏は上訴したが20年11月、懲役6年の実刑が確定した。判決は、鈴木氏が「中国の国家の安全に危害をもたらした」と指摘した。鈴木氏は日本で言う刑務所に当たる「北京市第2監獄」に収容された。**中には外国人用の施設があった。スパイ罪だけでなく、他の事件の囚人も収監されている。**まず始まったのが「新人教育」だ。

♪没有共产党就没有新中国(共産党がなければ新しい中国はない) 共産党辛勞為民族(共産党は民族のため懸命に働く) 共産党の革命歌をいやというほど歌わされる。中国語が読めない人にはアルファベットで記した歌詞が配られた。深夜、2時間にわたり廊下を歩き続ける訓練が1週間に1度あった。これは体にこたえた。約5週間の新人教育が終わった後も「洗脳」は続いた。毎日、中国国営中央テレビが制作する英語ニュースを見せられる。共産党史、日中戦争、朝鮮戦争などを描いた番組や映画では、共産党がいかに中国人民を救ったかが描かれていた。

刑務所は12人部屋が10室あり、それぞれに2段ベッドが六つあった。定期的に菓子や果物、粉ミルク、本などを購入することが許された。逮捕時に没収された金などから差し引かれる形で購入できる。「ポイント制」のような制度もあった。教材の箱詰めなどの労役をすれば、それに応じてポイントがもらえ、物品購入に使える。看守らと中国語でやり取りできる台湾人は、食事担当でポイントを稼いだ。

夜の見回りは体力がある若いナイジェリア人たちがポイント欲しさを買って出た。薬物の運び屋をしたとして逮捕されていたようだ。夜間、トイレなど個室に入る場合は2人以上を伴うというルールがある。鈴木氏もナイジェリア人2人に伴われながら用を足した。

22年1月。刑務所での2度目の正月を迎えた。刑期満了まで9カ月あまりとなった。それにしてもなぜ、自分が狙われたのだろう。中国大使館幹部や、日本政府の関係者との付き合いは確かにあった。ただ、日本には同様の人脈を持つ人は少なくない。そういえば取り調べでは、特に数人の中国大使館幹部について詳しく聴かれた。彼らが捜査対象で、情報を取るために私を逮捕したのだろうか。いくら考えても、答えは見つからなかった。

10月1日、中国の建国記念日を迎えた。刑務所では記念の歌唱大会が開催され、部屋ごとにチームを結成して革命歌を合唱した。日ごろは「共産党なんて大嫌いだ」と言っていたナイジェリア人も「優勝賞品がほしい」と一生懸命、革命歌を練習していた。優勝したのは鈴木氏のチーム。歯磨き粉や保湿クリームなどの賞品をもらった。

10月11日、出所の日が来た。早朝、身支度を整え、北京市第2監獄に別れを告げた。当局が用意した車で空港まで送られ、6年3カ月ぶりに北京を離れた。成田空港に着き、電車を乗り継いで住み慣れた実家までたどり着いた。拘束前は96キロあった体重。量ると、68キロまで落ちていた。2日後。何とはなしにテレビをつけると、石川さゆりさんが映し出された。監禁中、何度も心を癒やしてくれた人。その歌声に、つらい日々を思い出し、涙がほおをつたった。【「邦人収監」取材班】

### 「私の拘束にも政争が？」中国でスパイのぬれ衣、鈴木英司氏の信念

毎日新聞 2022/10/29



中国共産党大会で、退席を求められた際、李克強首相（手前右から2人目）の肩に手をかける胡錦濤前総書記（中央で肩をつかまれている男性）。手前右端は習近平総書記 = 北京で2022年10月22日、AP

2016年に中国の国家安全部にスパイだとして拘束され、今年10月11日に解放された日中青年交流協会理事長、鈴木英司氏（65）。なぜ鈴木氏が狙われたのか。今の中国への思いは。毎日新聞のインタビューに、思いを語った。

このインタビューは連載「邦人収監」の番外編です。

――訪中歴は200回以上。どのように中国に関わるようになったのですか。

◆1984年に日中交流の訪問団で中国に行き、そこで中日友好協会副会長の張香山（ちょう・こうざん）氏と出会ったのが大きい。張氏は夜の宴席で、ある会議での私の質問について「非常に良かった」と声をかけてくれた。以来、張氏と親交を深め、訪中のたびに会った。



来日した際に当時の細川護熙首相（中央）と歓談する張香山氏（左端）。知日派の代表的人物として活躍した＝首相官邸で 1993 年 11 月 19 日撮影

それ以来、日中友好活動が私のライフワークとなった。日中青年交流協会を立ち上げ、若者の交流にも尽力してきた。北京外語大などで教壇に立ち、中国には多くの教え子がいる。

——特に中国共産主義青年団（共青团）との親交が深かったと聞いています。  
◆共青团の国際部は交流窓口の一つで、長く付き合ってきた。李克強首相が共青团の書記だった 80 年代、北京で会ったことがある。  
胡春華副首相が地方勤務だった 90 年代に来日した際には知人の紹介で会い東京・赤坂見附でウイスキーを飲んだ。08 年に北京で開催された会合に出席した際、共青团トップの第 1 書記になっていた胡氏に「一緒にウイスキーを飲みましたね」と声をかけられ、その記憶力に驚嘆した。

——12 年に習近平氏が共産党総書記になって以降、共青团出身者は冷遇されています。  
◆習体制になった後、共青团幹部が「使える車は 12 台から 2 台に減らされ、幹部が中南海（共産党、政府の重要機関や要人の住居がある地区）にタクシーで行っている」と嘆いていた。

——（鈴木氏の）拘束は「共青团つぶし」の一環ではないかと一部でささやかれました。つまり共青团人脈を摘発することで共青团に圧力をかけているのではないかと、との見立てです。  
◆中国政府は 14 年に反スパイ法を制定した後、摘発を強化していた。日本の中国大使館や総領事館の幹部は、共青团出身者だけでなく（共産党で外交を担う）党中央対外連絡部（中連部）の出身者も、中国に一時帰国中、拘束されたり、事情聴取を受けたりしていた。  
つまり、習政権はこの時期、外国とつながりがある人への締め付けを強めていた。私の拘束が政争と関係があるのかどうかはよく分からないが、こうした一連の流れの中で、私が狙われた可能性はある。

——（鈴木氏に対する）判決によると、中国大使館の幹部らが取り調べを受け、「鈴木英司はスパイだ」という趣旨の虚偽の供述をしています。  
◆腹は立ったが、鬼より怖い国家安全部の聴取に対して筋書き通りに話さなければ、彼らが捕まる。そうなれば子や孫にまで影響する恐れがある。彼らを恨んではいけない。

——今回の収監について取材を受ければ、中国に行くことはますます難しくなります。それでも取材を受けた理由は何でしょうか。  
◆不当な拘束であり、冤罪（えんざい）だと訴えたかったからだ。ただ、残念ではないのは、中国の友人にもう会えないこと。私は彼らに会うのが楽しみで訪中していた。

しかし、仮に訪中できたとしても、昔の友人には絶対に会えない。そういうことをしたら、国家安全部は彼らを捜査するに違いないから。中国の友人たちと、ずっと一緒にいたい。でももう、それはかなわない。手紙を送ることもできない。

——今の中国をどう思いますか。

◆問題が多い。諸外国から人権問題について指摘されるのは当然だと思う。「中国には中国なりの人権がある」と（中国政府は）言うが、これはおかしい。人権は万国共通だ。世界第2位の経済大国がこういう態度でいいのか。海外からの批判には真摯（しんし）に耳を傾けないといけな

——今後の日中関係はどうあるべきでしょうか。

◆中国はどんどん軍備を増強し、覇権的な行為をしている危険な国だ。だが日本にとっては重要な隣国であり、嫌いだといっても互いに引越はできない。言いたいことを言い合える関係をどう作るかが大切だ。それは政治の役割であり、日中の首脳は極めて重要な責任を負っている。

——日本では対中感情が悪化しています。

◆「中国は怖い」と思って足が遠のくのは理解できる。だが隣国との関係が悪いままなのはよくない。個人的には（中国当局に）腹が立つが、私は今回の拘束があっても「日中関係は大事だ」との思いは変わらない。日本の若者、とりわけ日本の若い政治家には、中国が嫌いであっても、この「日中関係は大事だ」という認識だけは持ってほしい。

——中国のことは今も好きですか。

◆「私にあんなことをした国は大嫌いだ」とは言えない。「中国の友達とはもう会えない」と考えただけで涙が出るわけだから、嫌いだとは言えない。【「邦人収監」取材班】

#### 中国共産主義青年団（共青団）

中国共産党の青年組織。エリートコースとされ、胡耀邦元総書記、胡錦濤前総書記、李克強首相、胡春華副首相はいずれも共青団トップの第1書記を務めた。だが共青団との関係が薄い習近平氏が総書記となって以降、共青団出身者は冷遇されている。23日に始動した習政権3期目の最高指導部からは李首相が外され、胡春華副首相は政治局員（24人）から中央委員（205人）に異例の降格となった。